マル

衣谷創

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マル

【Ｎコード】
Ｎ５２３２Ｐ

【作者名】
衣谷創

【あらすじ】
マルリ。高校でのなかよし３人組。別に深い理由なんてどこにもなくて、ただ３人の名前を一つずつとってマルリ。そんなマルリが壊れてゆくまでの一部始終。

ぱーと1（前書き）

ひょんな気まぐれから投稿してみた次第。

ぱーと1

マルリ、という集まり。高校時代に同じアーチェリー部に所属していて、どういうわけだか仲良くなった三人組だった。それぞれの名前の頭をとって、マルリ。どこぞのアイドルグループのようなネーミング術である。高校を卒業してからはじめて会ったとき、リョウコが？マルリにしよー？なんていいだし、ルミは？なんか中二っぽい？と反対したものの、マサキが？いいんじゃない？？となって、多数決でマルリとなった。

そんなマルリ、この日は近くにできた大型ショッピングモールで遊ぶ計画だった。日中は散々いろんな店を見てまわって、時々ものを買ったりしながらワイワイとやっていた。そして夜、早めに入ったビュッフェバイキングの店での夕食をとった。店頭のチョコレートフォンテインが特徴的な店だった。

マサキは皿にステーキやらグラタンやら、いかにもカロリーの高そうなものを山ほど積み上げていた。牛ステーキにいたっては皿の半分を占めるほどだった。対してルミはカットされたモンブランやベイクドチーズケーキなどをあわせてホールがひとつできあがっていて、その上にショートケーキが二つ倒れていた。皿にのるケーキ十個。二人に文句するリョウコは普通なのかといえば、もっぱらサラダ系しかもられておらず、人のコトは言えなかった。とはいえ、最も体によさそうなのはリョウコの皿だが。

しかし早食いなのはこともあろうリョウコで、あっという間にザワークラウトとシーザーサラダを食べつくして、コールスローとポテトサラダとってくるね、なんて口にしながらも席を立った。リョウコもリョウコだよねー、とケーキをほおばる声に、マサキも、そうだな、と答えた。

マサキはステーキを口にしながらあたりを眺めた。見えるかぎり空席となっているテーブルはなく、その多くが女性グループだった。

男性の姿は家族連れの父親か、いわゆるカップルできているらしい人だった。いずれも少数派で、マサキのような友達連れできたなんて言うのはおそらく皆無だろう。確信はない、ただ、食事中の人々の笑顔がそう思わせただけだった。

マサキはやわらかい肉質からにじみでる肉汁を味わった。甘いとも辛いともつかない、肉そのもののうまみだ。ミディアムの焼き具合がそれをかむときまで隠していて、かめばたちまちあふれでる。ちょっと見た目の良い店の料理というのは、肥えていない舌には極上だった。

「ねえ、ちょっとお願いなんだけれど」

「ん、なに？」

「今度アキバいきたいんだ。サークルの備品とか私用のとかを買いたいから。せっかくだから、デートもしようよ」

「デート？　いいよ、でも、いつ？」

マサキとルミの会話の中、山もりのコールスローが戻ってきた。またサークルのコトー？　と口にしながら席に座るが、次のタイミングにはフォークをコールスローに刺していた。

「さりげなくきこえてたんだけど、デートって？　ふたり付き合いだしたの？」

「ああ、まあ、そんなとこ」

「へー、そうなんだ、そうなんだ」

リョウコの手が一瞬戸惑った。ふーん、と声にだして、フォークにのるコールスローを口に入れる。ちらっと隣のルミに視線を流すリョウコ。次に流すはマサキへ。

できている二人とその友一人。マサキに向けられているリョウコの視線がどこか気まずそうだった。そりゃあそうだ、見方をかえれば、カレシカノジョの間にリョウコが入っている恰好になっているのだから。この話題をつづけるのはまずい、いますぐにでも変えなければ、マサキはイスに座りなおして口を開いた。

やはりリョウコも同じコトを思ったか、マサキよりも先に手をう

った。次のマルリに主催者を誰にするかを決めて、それから、なにをしようかという話しあいである。
　するとたちまちルミが饒舌になった。あふれるばかりのルミの要望。しかしマサキはその言葉に耳を傾けるつもりは到底なく、しきりにリョウコに意識をそそいだ。いつもなら人が喋っていることなんて気にせずサラダを口にする彼女の手はなかなか動かなかった。マシンガンに似た言葉の嵐をうみだしているルミに目がいっているものの、それが話をきいているのとは少し違うのはなんとなく分かった。相づちもなし。ポテトサラダの上ではねあがるフォーク。つまらなそうな目つき。おしゃべりを楽しんでいない。
　リョウコがマサキの目に気づいたのか、自らの皿に目を落として、ポテトサラダをすくいあげた。すると、いままでにないペースでポテトサラダとコールスローを平らげて、おかわりに席を立ってしまった。リョウコの目つきはひどく冷めていた。リョウコには悪いことをしてしまった、マサキは心の中に平謝りした。

　若干失敗した空気だったマルリ—たぶんルミは気づいていないし、リョウコも気まずさのようなものでいっぱいだったろう—から一夜明けて、マサキの家にルミがいた。マルリというお遊びをしていたのだが、実のところ、マサキとルミは試験期間の真っただ中にいた。この日の午後に試験が待っている。その直前、二人がとっている近代日本文学史の試験勉強をしようというのだ。
　だったらマルリを延期しろ、とでもいいたくなるが、別の大学に通うリョウコと都合があうのが昨日だけでしょうがなかった、というのが首謀者であるルミのいい分だった。
　ふたりがテキストとノートを広げているテーブルはふたりで使うには小さいものだった。また、マサキは背後のベッドが背もたれがわりにしていて、ルミは後ろの二段引き出しのチェストが背もたれ。ベランダを仕切っている窓の上にはブラインドがかけられている。男の一人暮らしにしてはたいそうきれいにしてあると思えば、マサ

キの隣には寝まきがぬいだまま放ってあった。
休憩がてら台所に立ったマサキは、収納から銀色のマキネッタとコーヒー粉を取り出した。マキネッタを三つに分解して、一番下の部分には水を、真ん中の部分にはコーヒー粉を入れた。スプーンの腹でぎゅうぎゅうと軽く押しこみつつも平らにして、再びマキネッタを組み立てて、網をのせたコンロに置く。カチンとなる火のレバー。火は弱火。
「そういえばな、ネット見てたらいいサイトがあったんだ」
「へえ、どんなの？」
「ポエムとか、ちょっとした文章が書いてある創作系なんだけれど、文章がきれいで」
「マサキってそういうのに興味あったんだ」
「そういうわけじゃないけどさ、たまたま見かけてさ、いいなーって」
「じゃあパソコンつけていい？　私も見てみたい」
「ブックマの、？りょんの部屋？ってところ」
マサキはルミの言葉に口は使いながらも、目と耳はマキネッタにくぎづけだった。ガスの青い炎を前にしゃがみこんで、出来あがりを待っていた。エスプレッソが淹れられている音どころか、沸騰する音さえせず、聞こえるのはガスの燃えるゴオという音とパソコンが起動する音だけ。パソコンがおとなしくなれば、今度はマウスをクリックする音で、その頃になってようやくマキネッタから音がきこえるようになった。シュボーと、バルブでぎゅうぎゅうに高められた蒸気の圧力に押されてコーヒー粉の間を上がってゆく湯の音。フタ間から一気に噴き出す蒸気に、コーヒーの濃い香りが広がった。
「あ、あった。かわいいトップページだね」
「だろ？　そこの上から二番目のとこ」
「うんうん。ええと、これなんかどうかな？　隣のぬくもり、近くにあっても、距離は遠くて、手を重ねられる距離なのに、届かない……恋愛ネタかあ」

「基本的にそのノリだよ」
マサキはコンロの火を止めてからデミタスカップを用意した。アルミ製の細長く小さなそのカップにコーヒーを注ぐと、表面にはチョコホイップのような色をした細かな泡がのっていた。マサキはその泡めがけてスティックシュガーを一本ずつ。中のグラニュー糖は泡にはばまれ、その泡に溶けだしていた。シュガーを通さないほど強いそれ―クレマに、マサキは満足げにうなずいた。
「はいこれ、今日のは上出来だよ」
「ありがと。んー、いい香り。でさあ、マサキってこういうの好きだよね、恋愛ものだけど、片想いネタっていうのかな？　でも最後には成就する的な」
「ルミだって嫌いじゃないだろ？」
「嫌いではないけど、好きでもないっていうか。片想いネタってどれも同じように感じるんだよね」
ルミはコーヒーをすすりながら、ホームページのほかの作品をクリックした。たまたま表示された作品は散文で、でもひと文が短いのでポエムとあまり変わらないような印象だった。たしか、マサキが覚えているかぎり、やはりそれも片想いネタで、学校からの帰り道のコトを女の子視点からつづったものだった。
ルミがニュウっと上半身を乗り出して、パソコンの画面に視線を注いだ。画面上の読みづらい文字に目を凝らす中、時々、ふーん、とつぶやいた。背もたれに背中を預けるときがあるけれども、そのときはきまってコーヒーを口に含んだ。スクロールして、背中を預けて、コーヒーをちびちびと飲む。外を走るトラックによる振動を地震と勘違いするぐらいの静かな時間だった。
コーヒーを飲みほしたと同時に、ルミは画面のブラウザを消した。やはり口からでるのは、ふーん、だった。そう口にしながら、ナミは席をたった。
「小説のワンシーン」
「それが一番しっくりくるかな。できるならばちゃんとはじまりか

ら終わりのある物語を読みたいものだけど」
「りょんって人にそこまでの力はないってことでしょ」
「手厳しいね」
「集中力と持続力。うちのサークルにでも入ってれば簡単に養えるものを」
「まあ、アレで必要な集中力はダテじゃないからな。的をねらって、照準を合わせて」
マサキは手で拳銃の形をつくってマミをねらった。プシュン、と口をとがらせながら銃声を発し、手の銃の銃口がはねあがった。なにそれ？　とルミはカップを水で洗い流しながらバカにした。デミタスを食器かごに逆立ちさせてから、両手で拳銃をつくって撃ち返した。
「明日はどれぐらい人が集まるかな？」
「正直、俺らしかいないんじゃない？　だって俺らは今日で試験が終わるけれど、まだ試験期間の真っただ中だからね。試験が残ってれば来ないだろ」
「やっぱ試験期間中はサークルを休みにしておくべきだったかな」
「まあでも、サークル全体の活動日ってのはないんだし、いいんじゃない？」
「それもそっか」
ルミが台所から戻ってきた。マサキの横をよこぎってテーブルに中腰となった。よこぎるとき、さりげなくマサキの腰に触れた。授業ノートとテキストを手にとり、かばんにしまうと、マサキの名前を呼んだ。指さす先には掛け時計があって、大学へ向かうにはちょうど良い時間をさし示していた。

ぱーと2

文学史の試験は上々だった。レポート提出でもいいのではないかと内心思いながらも、写実主義の位置づけについてダラダラ書いて、試験開始から三十分で教室をでた。まあ単位が取れるほどの回答ができたろうとマサキは踏んでいた。教室をでるときにチラッとルミの姿を見やったところ、すっかり猫背になって解答用紙に迫っていた。どうやら苦戦しているらしい。レポート作成試験に持ち込み不可、しかも出題内容は知らされないなんて鬼教授としかいいようがないといったところか。まわりを見れば、マサキの座っていた席以外に空いているところはなかった。

さて帰ろうかというときに、ルミがメールで勝負をしようといいだした。理由は分からないが、とにかくマサキと勝負を、試合をしたいというのだった。

ルミが主宰するサークルの部室はサークル棟三階の大きな部屋だった。サークルに入っている人数が十三人に対しては広すぎるぐらいだろう。しかし、ルミがつくったサークルには、この広さがあってもぎりぎりだった。

部室内の射撃場。ルミとマサキは十メートル先にあるムーバーというターゲットを前にスタンバイ姿勢をとっていた。おおよそ三〇×六〇ミリメートル大のターゲットは、一〇メートル離れるとかなり小さかった。

手に持つのは、両方ともボルトアクションのライフルだった。マサキがもっているのが黒を基調としているシンプルな、悪くいえばよくある見た目の猟銃のようなライフルである。対して、ルミがもっているのは、銀色の輝きがまぶしい、肩にあてて安定させる部分―ストックのひねり具合や傾き具合が調整できる、いかにも競技仕様といったライフルだった。ただ、どちらにも、スコープと呼ばれる光学照準器がついていないことだった。

部室内にビープ音が突如響いた。ムーバーの的が左から右へと動きはじめた。たちまち構えるふたり。ターゲットが止まることはなく、しかも案外と早い。ルミは動作中のターゲットを撃ち抜き、ムーバー装置についているＬＥＤが光った。マサキも必死に的を追って発射するが、端にいたってビープ音。パシュという音とともに発射されたＢＢ弾は、むなしくもターゲットの左側に抜けた。壁にぶつかって、床に落ちて、乾いた音数回。

エアスポーツガンを使った精密射撃競技ＡＰＳがこのサークルの活動である。ライフルとピストルの二部門があり、それぞれ三種類の標的を射撃し、合計ポイントを競うものだ。そのうちライフル部門特有のムーバーターゲットは、競技の中でただ一つ動くターゲットをねらうため、難易度が高い。

ルミに誘われてはじめたマサキには対応できるだけの実力はなく、規定二十発のうち半分も当てられなかった。そもそもライフルではなくピストルをやっているわけだから、当然の結果といえばそういえるし、前向きにとらえられれば、八発もあてられたのだからよいじゃないか、となる。

マサキはしゃがみこんで、足もとの記録用紙にバツと印をつけた。そうしてから移動するのは隅に置かれた長テーブルだった。長テーブルは二つをくっ付けて、かなり細長いテーブルとしていた。

ライフルをガンケースの中におさめてから、マサキはパイプイスに腰を下ろした。対岸にはルミが座るだろうパイプイスで、横で彼女はＢＢ弾を銃から取り除いている最中だった。

「でも、その銃新しいよね。買ったの？」

「そうだよ。いやあ、ストックの部分が自分好みに微調整できるってきいたら、ライフル使いにはたまらないでしょ。それでお金貯めて買ったんだ。十万ちょっとは遠い道だったよ」

「だから急に勝負だなんて」

「早く撃ってみたくてうずうずしたんだ」

「色もすごいな。シルバーとブラックのツートーンカラーだし、全

体的にＳＦチック」
「でも逆に調整が難しいんだよね、たくさんいじれる場所があるから。これからしばらくは調整だね」
　席についたナミは、記録用紙の得点を計算しだした。マサキも計算しなければならないのだが、ナミの採点に目を奪われていた。ライフルを中心に取り組んでいるナミの得点はさすがだった。アーチェリーの的のような円形ターゲットを射撃するブルズアイ競技では百点中八十七点、横に並べられたターゲット八つを順に射撃するプレート競技では六十点中四十点、ムーバー競技では四十点中三十二点。合計百五十九点というのは、全国大会で上位に入れるだろう好成績だ。
　すごい、とひと言してから、マサキはようやく自分の得点を計算しだした。マルをつけたところをペンで指さし、バツをとばして、得点をだしてゆく。ブルズアイ七十二点、プレート二十四点、ムーバー十二点、合計は百八点だった。まあまあとはいえるが、マサキには不満が残る結果だった。
　結果どう？　とルミが身をのりだしてきた。それぞれの競技の得点を指さしで確かめて、最後の合計に指をさしたときは、やった、とつぶやいた。
「私の勝ちだね」
「勝てるわけないよ。オレはピストルだぞ。ライフルなんか最初にルミに触らせてもらってから以来だぞ」
「じゃ、私が勝ったんだから、デートでなにかおごってね」
「え、そういうコト？　きいてないよ」
「いいじゃないの、この勝負を受けた時点で、マサキがおごることは決定してたの」
「勝っても、負けても、ってコト」
「そーゆーコト」
　ルミは背もたれに体を反らせて、腕をうんとのばした。口からもれる声はどこかエロティックで、マサキは見づらくて視線を外した。

たまたま、その先に時計があって、三コマ目の時間が終わろうとしていた。
ルミはおもむろに立ちあがって、壁ぎわの棚に足を進めた。一角にある書類コーナーから細長い用紙を取り出した。射撃日時、ライフルかピストルか、競技ごとの得点と合計得点、本人と審判役の署名を書く欄があった。それがサークル内ランキング用の登録用紙だった。月ごとのランキング成績をだすのが決まりゴトなのである。
頭上にチャイムがとんだ。チャイムといっても鐘がなっているような音ではなく、テレビ番組のオープニングのような音楽だった。
時計を確かめるルミは、マサキの前にある黒いケースを指さした。やらないの、とたずねれば、マサキはケースを開ける。黒い銃が入っていた。
「いや、ルミは大丈夫なの？　時計を気にしてたけれど」
「これからは特に用事ないよ。私もライフルの調整したいし」
「じゃあ、俺もちょっと触っておこうかな」
マサキはケースの中の銃を取り出した。シンプルにしていかつい、いかにもスポーツ銃といった風貌だった。

黒い銃こそ、マサキがようやく買った競技用ピストルだった。ピストルなのだが、ボルトアクションというライフルのようなＢＢ弾装填システムをもつピストルだ。競技用として認定されている専用銃としては一番安いもので、その額およそ一万七千円。
一時間ほどの練習の間、ひたすらに銃の調整をつづけて、最後にはまた一試合をした。そのせいでマサキは頭がボーっとしている感覚だった。秋葉原まで移動する間は、ルミが話しかけてくれなかったら寝てしまうだろう程の状態だった。
しかしそれも電車の中までのコト。秋葉原の喧騒につつまれるやいなや、マサキの目はすっかりさめて、左右をうめるごちゃごちゃした光景に目をなぐられるのだ。
まずは用事のあるエアガンショップに立ち寄った。そこで備品と

してのBB弾と私用としてのBB弾を買った。エアガンというと男の遊びで、エアガンショップというと男のたまり場のような印象で、マサキとルミはエアガン大好きマサキにいやいやついてきた女の子ルミといった第一印象だったろう。しかしたちまち商品を前にしたときのルミはマサキ以上にテンションが上がっていた。集弾性をよくするパーツなどを見るルミはまるで洋服をウィンドウショッピングしている女の子のような輝かしい目をしていた。たちまち第一印象はねじれ、銃大好きな女とそれにつきそう男、という構図になるのだった。実際、どれがそれまでルミを興奮させるのか、マサキは全然分かっていない。

しかしエアガンショップさえでてしまえば、よくあるデートに様変わりした。家電量販店をはしごして家電やパソコン、ケータイを見てまわり、晩ごはんにはおいしいとウワサのカレー屋に立ち寄った。店の奥側に案内されてからチキンカレーとキーマカレーを注文した。日本とは違うスパイスまみれの味付けに戸惑っていたが、舌が慣れた後半になると、すっかりやみつきだった。

さいしょはいまいちだと思ったけれどハマる味ね、とルミがナンをちぎっていた。ひと口大のそれをカレーにつけており、マサキはほほえましく眺めていた。手はのそのそとナンをちぎっていた。

三つのテーブルをはさんで、窓が通りの様子を切りとっていた。ふとマサキが目を雑踏に向けたところ、灰色じみた赤の他人の雑踏の中、鮮やかな色合いの髪の毛が見えた気がした。ライトブラウンの髪、西洋人のようなすらっとした高い鼻、見おぼえのある目じりや輪郭―

「どうしたの？　ボーッとしてたよ？」

「え、あ、いや、なんでもない。ちょっと疲れたのかな」

「早いよマサキ。これからがデートの本番だってのに」

「ルミはこれからなにがしたいんだい」

「ええと、考えてない」

「考えてないって、おいおい。本番っていうんだから考えてたんじ

ゃないのかい」
「だってアキバは最初のショップ以外知らないもの。アレかな、メイド喫茶なんかは？」
「あれは男女で入るものじゃないと思うぞ」
窓の向こう側で、リョウコに似た人がこのカレー店の看板を見上げていた。それから路上にあるメニューを書いた看板を見下ろした。中を覗きこんだ。マサキは目があってしまったような気がして、すかさず視線をカレーに落とした。異様な熱がほおにわきあがり、鼓動が激しくなった。おそるおそる視線をあげると、考えているらしいルミの奥で、リョウコ似はこちらに向いていた。まるで凝視するような強い視線をマサキは意識しつつ、ルミを見つめた。
「んー、じゃあオタクショップ」
「ん、ええと、アニメばっか集めたような店のコト、かな」
「うん、それそれ。アキバ、っていうとそんなイメージしかなくて。家電とエアガンとオタク」
「だったら歩きまわってアキバがどんな街が探ってみる？」
「それもいいね」
ルミが再びカレーを口に運んだ。何度かかみ砕いてからあふれだす笑み。マサキもにんまりと笑ってみせるが、その裏腹、目にしている光景のコントラストにヒヤヒヤしていた。まだあの目が立っている。
マサキの笑みが次第になくなってゆく。考えすぎだ、といいきかせた。そのようなコトは勝手な思い込みで、彼女は全く別のものを目にしているのではないか。だが、彼がリョウコの行動を全て知っているわけではない。この状況を見られたとすれば、マルリの関係はもっと悪くなるような気がした。とにかく、リョウコ似のまなざしがひどく恐ろしかった。
「やっぱ疲れてるんじゃない、また暗い顔して」
「ごめん、ちゃんと寝たはずなんだけれどな。練習の射撃がこたえてるのかも」

「もしかして、デートつまらない？」
「まさか。ルミと一緒にいるんだから」
「そんなこといっちゃって」
　ルミのはにかみ笑いはマサキには愛らしいものだったけれども、背中の向こうにある存在のせいで素直に笑えなかった。ムリヤリ笑ってはみたものの、ぎこちなかったし、笑っていて気持ちが悪かった。ついにルミがけげんな顔をして、体調についてたずねてきた。大丈夫と答えても、体調悪いんじゃない？　とくりかえしたずねてきた。
　ようやく窓から背中が動きはじめた。右向け右をして、競歩しているかのような素早さで歩き去ってゆく。人ごみに消えるのはあっという間だった。リョウコ似がいなくなって、マサキの中のぐちゃぐちゃした気持ちも立ち去ったらしかった、気持ち悪い感覚がなくなって、素直に楽しい気分になってきた。
「それじゃ、ご飯食べてからは歩きまわってみよう。どこかでオタクショップがあればそこに寄って」
「本当に大丈夫？　だめだったら素直に帰ろうよ」
「ううん、大丈夫だから。オレがどんだけ頑丈か、ルミだったら分かるだろ」
「そりゃあイヤなくらい分かってるけれど、なんかヘンだもん、なんか抜けがらとしゃべってるみたい」
「抜けがらとはひどい」
「抜けがらが一番しっくりくるよ。うんうん、きっと私が話しかけてないと抜けがらまでどこかに飛んでいって帰ってこれないよ」
「なにその訳分かんないたとえ話」
　マサキは笑ってナンをちぎった。今度は自然な笑顔だ。ルミもマサキに合わせるかのように笑みを浮かべる。ルミの手が紙ナプキンをもんでいた。いつの間にかルミはたべ終わってしまって、マサキがたべ終わるのを待っていた。

ぱーと3

食事を終えて恋人つなぎのふたりは、はるか頭上にそびえる建物の看板を見上げながらの散策をしていた。夏場とはいえ、さすがに暗くなってくる時間である。テレビで放映されているアニメーションのキャラクターが巨大な看板を占領していたりするのが、青や緑に髪を染めた女の子のキャラクターが水着姿になっているイラストがかかげてあるのが目についたりした。

歩いてみると、秋葉原がいかにゴチャゴチャしているのかがよく分かった。見上げればどこにも看板があって、なんらかの秩序があるかといえば全くない。どれもこれも自己主張しようと前にでようとしていて、圧迫感にも似た感覚になる。店先に視線を移せば、整然と置かれているのか乱雑に置かれているのか分からない商品の山だ。どれもこれも、あたかもひな壇の芸人のように、マサキたちに迫ってくる。マサキと同じように街を歩く観光客の外国人にとっては、これがおもしろいように見えているのだろう。はっきりといって、マサキは好感がもてなかった。

だからといってデートがつまらないわけでは決してない。要は、ルミが傍にいてくれればよいのである。

「なんどかきてるけど、ここまでくるのは初めて」

「きてるって、アキバに？」

「うん、もっぱらあのショップだけど。ほんとにコアなものばっかりあるよね、電子部品とか、パソコンのパーツとか」

「秋葉原って本来そういうところだからね。電気街とか工学系って感じ。アキバが文化拠点みたいになったのはつい最近のコトじゃん」

「でもそのせいかな、なんかいろいろありすぎて目が痛いというか」

「イイ気分じゃない、って？」

「上手くいえないんだけど、そんなとこ」

マサキはニヤリと笑みを浮かべた。ルミの目がかなり輝いている

ものだから、てっきり秋葉原のゴチャゴチャ感が好きなのかと思いこんでいた。でも、ルミもよい気持ちも抱いていなかった。マサキと同じように！

「なにがおかしい？　笑うようなところなんてなかったでしょ」

「いや、考えてるコトはおなじだなって。オレもさ、なんだか」

「やっぱ慣れてないからかな」

「それもあるだろうけれど、きっと生理的なレベルだと思うな」

「マサキはそうなんだろうね。さっきから手の力がちょっと強いもの」

マサキは恋人つなぎを見下ろした。手に宿るルミの熱が強く感じられた。力に押しつぶされて、ルミの手が固いもののように感じられた。力を緩めてみればたちまちルミの手が柔らかくなる。もう一度強めにぎりしめてみて、ようやく、力を入れてしまっていることに気づいた。いつから強くなっていたかとたずねてみれば、水着姿のイラストがあったあたりだと答えた。

気づかなくてごめん、と答えて、マサキは視線をルミから正面へとやった。ゴチャゴチャした雑踏。だがマサキは、雑踏の中に鮮明なものを目の当たりにした―ライトブラウンの髪の毛。すっかりくすみきった世界の中、その髪だけはまばゆいほどの輝きをまとっていた。

リョウコ似がゴチャゴチャの中を迫ってくる。マサキたちもまた、リョウコ似に迫ってゆく。ルミをちら見すれば、やはり気づいている様子はなかった、左側にある店の様子を眺めていた。

ますますリョウコ似が近く大きくなってきて、顔つきがどのようなものであるかはっきりしてきた。輪郭は丸くなだらかで、チークが赤い。やや細い眼には鮮やかなアイシャドウと、マスカラでかさましたまつ毛。マスカラではなくアイラッシュかもしれない。まつ毛が化粧しなければありえないぐらいの長さとなっていることだけは確かだった。薄い唇には、鮮やかなピンクのルージュがぬってあった。

リョウコ似は？似？ではなかった。マサキが見た限り、まちがいなくリョウコ本人だった。ただ、どこかの制服を思わせるような服装をしていて—高校時代の制服ではなかった—、かつて見たことがない恰好だった。

リョウコとはすぐ目があった。カレー屋のときと同じ強い力を備えていた。人ごみの中、進行方向を見ようとせず、マサキを睨みつけているかのようだった。ちょっと視線を落とせばちらちらと手に提げる紙袋が目に入って、人をデフォルメしたキャラクターが描かれていた。そのキャラクターの雰囲気が、ちらほらと目にしている？オタクショップ？のもののようだった。

リョウコにそういう趣味があるとはきいたことがなかった。あの紙袋の中にはなにが入っているのだろうか。一般的なゲームか、漫画か、それともコアなものたちか？　しかし秋葉原に免疫のないマサキにとっては、そもそもオタクショップの紙袋なのかさえも分からない。なんとなくで雰囲気をそう思ったのだが、結局どれがオタクショップでどれがそうでないのかを理解していなかった

すれ違うときでも、マサキはリョウコから目を離さなかった。いや、目が離せなかったというべきだろう。マサキはその容姿もさることながら、リョウコの熱く強い視線に羽交い絞めにされてしまっていた。

リョウコが通り過ぎたあと、とても甘い香りがした。リョウコが香水をつけているのは珍しいことではないが、甘ったるい香りのリョウコははじめてだった。マルリの席で嗅いだコトのあるリョウコの香りといえばかんきつ系のもっとサッパリしたもので、バニラエッセンスをひたすら煮つめたような香りではなかった。

リョウコのバニラ臭はしかし、たちまち灰色の雑踏にかきまぜられて、カレーやら誰かの体臭やら下水やらのいろんなにおいが混じったカオスとなってしまった。

「ねーねーマサキ、あれ、前ネットでみた店」

「オンラインショップをやってるところか、そういえば熱心にサイ

ト見てたよな」
「ちょっとおもしろいかなーっていうゲームがあって。中見てみたいんだけど」
「ん、じゃあいってみようか」
やはり、ルミはなにも気づいていなかった。リョウコの姿も、リョウコ似の誰かの姿も、ルミの眼中にはなかったのだ。

ナミがショップで買ったものは海外版のシューティングアクションゲームだった。架空の戦争に身を投じるひとりの兵士となって、あるときは突撃、あるときは狙撃といった様々なミッションをこなしてゆくというもの。偵察や潜入もやるという、まさにナミ好みのものである。その手のゲームはほかにもあったのだが、世界最大のプレイフィールド面積というのが決め手だった。
そしてナミは、ちょうど自分のパソコンにそのソフトをインストールしている最中だった。画面にはＤＶＤ２からＤＶＤ３にインストールディスクを交換するよう英語で指示がでて、ナミはケースからディスクを取り出した。
手持ち無沙汰なマサキはおもむろに立ちあがって、ルミの部屋のある壁を眺めた。壁にはペグが打ちつけてあり、様々な銃がひっかけてあった。競技用のライフルが一丁にピストルが二丁、ほかには本物の銃のような外見のピストルとリボルバーがそれぞれ一つずつあった。ピストルを手にとってマガジンを外して見れば、実銃のような銃弾があった。机の横には？モデルガン用？と大きく印字された火薬キャップの箱が置きっぱなしだ。その傍には、ピストル用の弾倉があった。どうやら彼の手にある銃はモデルガンらしかった。女の子の部屋には全く似つかわしくないが、ルミの部屋となれば、それらはたちまち？らしい？アイテムとなった。
マサキは銃を構えてみた。ずっしりと腕にくる重い感触を体感しながらも、不謹慎にもルミに照準を合わせた。
「そういえばアキバにリョウコいたみたいなんだけれど、気づいた

？」
「リョウコが？　うそ、私は気づかなかったよ」
「ルミはずうっと店の方ばかり見てたからね」
「教えてくれればよかったのに。で、どんな感じだった？」
「ひとりできてたみたい。どこかの制服みたいな恰好で、香水もよくかぐものじゃなかった。いつも爽やかな感じだけど、甘ったるかった」
「もしかして秋葉原でバイトでもしてるのかな。だったら制服姿っていうのも説明つくし。でも、リョウコの家から秋葉原までって、結構な距離あるよね」
「へんだよね、近場で済むはずなのに」
　ルミはパソコンの指示に従ってインストールディスクを交換したのち、マサキに歩み寄った。銃を奪うと、中に入っていた弾倉を取り出し、机の上にあったものと交換した。銃上部のスライドをひっぱってシリンダーの中に薬きょうを収める。おもむろに壁をロックオンして、引き金を引いた。乾いた炸裂音と、火花。スライドが反動で激しく動いて、中に入っていた薬きょうが排出された。白いモヤモヤが銃の上に漂っていた。
「秋葉原の方が給料いいとしても、交通費でプラスマイナスゼロじゃないのかな」
「交通費ってでるものでしょ。それにリョウコの大学はそっち方面」
「家からバイト先までを申告しておけば、通学ルートと共通する分はお得っていいたいわけかあ」
「やっていいか悪いかは別として。でも、あっちだったら千円は当たり前なんだから、東京でやるにこしたことはないでしょ」
「そうかもしれないな」
　ルミは次にパソコンをねらった。片手で銃を操り、パソコンめがけて撃ち抜いた。ふぬけた銃声が部屋中にとどろくが、パソコンには傷一つなかった。煙が立ちのぼるる中、インストール作業が終わった。かと思えば、再起動するよう指図してきた。

「マサキ、やっぱり疲れた目してる」
「そりゃそうだ、秋葉原をあるきまわったんだから」
「それにしても、だよ。まるで比較文学の試験を受けたあとみたいな表情。ほら、単位とれるかどうか分からないっていってた授業」
「そんなひどい顔してる？」
「うん、してる」
マサキは手を自らのほおにそえた。ルミの部屋にいるだけですごく楽しい気分になっていたのだが、ルミのその言葉を耳にして、急にどっと疲れが体じゅうに貼りついてきた。特に太ももにまとわりつくものが重かった。手首にもダンベルがついているかのようで、ほおに手をつけていることさえもだるくなってきた。
マサキのTシャツを小さな手がつかんだ。ルミの温かさが腰に溶けこんでゆく。ジュワジュワとはがれおちてゆくだるさ。ルミの言葉でだるくなって、ルミの手でだるくなくなるなんて、ただ無意識にもルミとの触れ合いを求めていただけなのではないか。ふとわきあがってきた疑いも納得できるほど、じんわりとした温かさは心地よいものだった。
テーブルの前に座るようにいって、ルミはマサキの背中をおした。テーブル前まで押しやった腕は、次に肩をつかんで床に座らせた。あぐらをかくマサキの隣にルミが腰を下ろした。手が離れたかわりに二の腕がぴったりとくっ付いて、肩からの温かさもまた心地よいものだった。
「それにしてもさ、アキバでバイトしてるんだったらそうしてるって教えてくれればよかったのに」
「教えてもらってどうするんだ？」
「ええと、なんかサービスしてもらえるかなー、なんて」
「アルバイトの分際でそんな気前のいいコトできないでしょ」
「でも私のバイト先だと、友だちだっていっておけば割引してもらえたよ」
「その分給料差し引きなんじゃないか？」

「ううん、そんなことなかったよ。いつもと変わらずの給料だった」
マサキとルミは同じ一点を見つめていた。とはいっても特定のどこか、というわけではない。ただぼんやりと同じ方角に目を向けているだけだった。目的なんてない。漠然と、一緒に。
言葉が途絶えた。マサキの耳に入ってくるのは、依然として再起動を求めているパソコンの動作音と、隣から聞こえるかすかな吐息だった。ちらっと隣に目をやってみれば、ルミもまた目を向けていた。視線が重なりあい、世界がマサキとルミの二人だけになった。
接吻をするなら絶好の機会ではあるが、しかしマサキの脳裏にはリョウコの姿が駆け巡った。どこかからリョウコがのぞいているような気がしてきた。ありえないコトだといいきるだけの勇気が今のマサキにはなかった。?会うはずがない?とさえ思っていない秋葉原にて、リョウコを見てしまったのだから。しかも二度も、である。
鼻先をルミのにおいがくすぐった。リョウコの姿はすぐさま消え去るのだが、それでもキスしようという雰囲気には戻れなかった。見つめる先にあるのはルミの強い視線で、マサキは耐えられずに目を逸らした。だが、顔の距離を離すほど冷めた気持ちでもなかった。

ぱーと4

疲れたといって、マサキは自宅に帰った。ルミは自分の部屋で寝ててもよいと帰す気はさらさらなかったようだったが、ひとりになりたかったのでその申し出を断った。だがルミはどういうわけだかマサキを離そうとはせず、ぐだぐだが長引き、終電での帰途となった。

マサキは折りたたみ式の机を立て、その上にパソコンをすえた。電源ケーブルをつなぎ、電源を入れて、それからマグカップをエンターキーの横に置いた。折りたたみのパイプイスに腰掛け、マサキは腕を組んだ。

秋葉原にいたのはまちがいなくリョウコだった。彼女に一卵性の双子がいるわけではない。世の中には瓜二つの人物ドッペルゲンガーがいるものというが、そんな空想を信じるわけにもいかない。確かに、デートしているまさにそのとき、秋葉原にはリョウコがいたのである。

マサキはマグカップの取っ手に人さし指を通し、中の黒い液を揺らした。白い湯気がほんのりとのぼっていた。口元に寄せて、半分ほどを流しこめば、舌に苦みがかけぬけた。頭のごちゃごちゃした感覚が薄れてゆき、たちまち働きはじめた。

潤滑油を得た頭は二つのリョウコを思い浮かべた。一つはカレー屋の窓におさまっていたリョウコ。もう一つは、通りを歩いていたリョウコ。二つのリョウコが同じ服装だったか照らし合わせてみる—同じ。髪の毛は—同じ。

アクティブなマサキは、しかし、同じはずである二つの像がうまく重なりあっていないような気がした。二人の像がもつそれぞれのパーツは全く一致するものの、それでも違う。オーラというべきか、彼女の体からにじみでているなにか空気的なものが、ぴったりかみ合わない。窓の中にいたリョウコには特になんともないのだが、通

りにいた彼女は明らかに異様だった。オーラを色であらわすことができるならば、まさしく真っ黒、あらゆる色彩を失った感があった。
見かけただけでも変なのに、見かけたそれぞれがまるで別人のよう、というのはもっと変だ。変どころではなく本当に別人だったとするのが自然に思えてしまうほどだった。しかし確かにあの髪の傷み具合や顔つきはリョウコでまちがいなかった。
なにを見ていたのか、どうして見ていたのか、ふとリョウコ似の目に考えが移った。カレー屋では、マサキははっきりと彼女のまなざしが自身に突き刺さっていると感じていた。しかしそれは席と外までの距離があったために気のせいかもしれなかった。しかし雑踏での目については？気のせい？では片づけられなかった。あかさらまに、これでもかというぐらい、わざとらしくその視線を注いできたのだ。
リョウコの姿を思いかえしている間に、ブラウザ画面でりょんのホームページが表示された。更新履歴によれば、創作と日記コーナーで更新した。まずダイアリーのリンクボタンをクリックすれば、買い物にいったことを伝えるたあいもない記事があった。画像がのせてあって、ごちゃごちゃした街並みがうつされていた。街並みに封じこめられた空気が秋葉原のそれだった。見覚えのある光景だったものの、どこだったかまでは思いだせなかった。
マサキは創作コーナーに入った。？ＮＥＷ？のポップアップが点滅しているのは二つの作品だった。タイトルの後ろに二重山かっこで囲んであるカテゴリを見れば、《詩》とあった。
しかしそれぞれを読んだマサキは詩とは違う力をその作品に感じた。そもそも、りょんというハンドルネームが普段書く作品とは別ベクトルだった。片想いの心境だとかささやかな発見をつづった淡いものをネタにした表現がりょんのベクトルにもかかわらず、二つの詩は攻撃的で、激しかった。詩というよりも、殴り書きのような印象だった。
どうしてあの女は！　あたしだって好きなのに

友情をこわしたくないからあたしは　我慢していたんだ
あたしの目がなくなったからって　あの女はでしゃばりやがった！
卑怯ね　いやらしい女よ
だからあたしは撃ってやったんだ　心の銃でなんども　その姿がなくなるまで！
印象どころではない。まさしくキーボードをなぐっている。けたたましいキーボードをたたく音とともに、りょんは女を撃ち抜いた。キーボード連打で女をけなしたおした。
もう一つの創作にいたっては、より強烈なものとなっていた。おそらく撃ち抜いた女と同じなのだろう、その人物のうつっている写メをケータイから探しては消去し、卒業アルバムにその姿を見つければカッターできりきざんだ、とあった。写真のアルバムから女を見つけては燃やし、燃えかすをボールペンの頭ですりつぶした。
感情をあらわにするというよりも行動を描くことに終始しているポエムだが、行動だけでも恨みつらみがにじみでていた。直接行動にうってでたのだから。よっぽど？女？にいやな思いをさせられたのか。
淡い思いを表現する人が突然激しくなるとは、いったいどのようないやなコトをされたのだろう。片想いの気持ちをうたいあげるような心をもつ人が、人を罵倒する表現をするとは思えなかった。些細な変化にも注意を向けられるような人が、人をけなす文章を書いたその先を見通すことができないわけがない。人が傷つくコトぐらい分かるだろうに、りょんはあえてそうした。耐えられなかったのか、わざと傷つけるよう仕向けたか。
液晶画面の右下にポップアップが現れた。メールクライアントが新着メールを知らせており、件名は無題で、差出人はリョウコのパソコンからだった。画面をブラウザからクライアントに切り替えて、受信ボックスの太字となっている《無題》をクリックする。右下の部分に本文が浮かびあがった。その広さに反して、たったひと文の

疑問文、？マルリのコトは決まった？？
後ろめたさや気がかりを感じようのない短い文章だった。リョウコはマルリに前向きではないだろう、そう勝手に思いこんでいたコトをマサキはようやく認めた。次回主催者に催促じみたコトをするのだから、やるつもりではいるようだ。
まだ決めていないコトを返信したと同時に返事が戻ってきた。まるでマサキが返信する前に送信したかのようだった。内容もマサキの返信を見なくても書ける内容で、？決まってないならカラオケがやりたい。できるだけ早く、今週中にも？だった。

週末に急きょ開催されたマルリは、母校の近くにあるカラオケボックスでのカラオケになった。使い慣れているところでもあり、日中フリータイムが安いコトもあって、場所についてはすぐ決まった。
リョウコが男性グループの曲を歌っていた。ヒップホップの曲調にリズムに乗って、リョウコは頭を少しばかり揺らしていた。歌詞が途切れる度にマイクを太ももの上に置くようなそぶりをして、歌詞がはじまる直前に口もとへと運んだ。手はマイクをしっかりと持ち、小指もその黒い胴体にはりつけていた。
マルリとしての集まりで、ただむやみにずっとカラオケをするわけがない。カラオケの採点機能を使って、七十五点を下回ったら罰ゲームを受けるというレギュレーションをマルリで、実質マサキとルミ二人の申し合わせでつけ加えた。罰ゲームというのは、ドリンクバーにあるいくつもの飲みものをまぜたものを飲むといったもので、なんどもやっていることだった。
リズムよく打たれるパーカッションの音がマサキの耳には心地よかった。ドラムに加わるエレクトリックな音が華やかな輝きと体にしみる味わいを残してゆく。重なるリョウコの声が時々音を外した。
わずかに外した音が命取りだったか、採点結果を目の当たりにしたリョウコはまん丸の目をマサキに向けて、それからリョウコに。これから起こるある意味恐ろしいコトを分かっているだけあって、

訴える目が切実だった。とんでもない配合をしないよう訴える目に、マサキは表情を変えなかったけれど、ルミはマッドサイエンティストさながらの笑みを浮かべていた。
「なにをベースにする？」
「いや、できれば普通にしてほしいんだけど」
「それはルール違反だよー、三つか四つは混ぜないと」
「一番ヤな罰ゲームなのよね」
「それじゃ、私が配合してあげるねー」
ナミがリョウコのコップをひったくって部屋を足早にでていった。カラオケの画面にでている曲はナミが入れたもので、よりによって前奏なしでいきなり歌詞が入るものだった。前奏がありさえすればその間に戻ってこられるだろうに、そうできる間もない。すでに画面のでている歌詞が左側から染まりつつあった。だからといってなにか対処しようとするつもりは―一時停止したり取り消したりするつもりはマサキにもリョウコにもなかった。
リョウコと二人っきりになるという状況がなんだか気まずかった。チラチラとリョウコの顔色をうかがおうとするもおそるおそるだった。薄暗い部屋であるから余計に表情が分からなかった。それでもリョウコの高い鼻は存在感があった。
気まずさが気持ち悪かった。リョウコの目がテーブルの歌本を見下ろしていた。ペラペラと歌を探すわけでもなくめくるリョウコは、目がとてもつまらなそうだった。口に笑みが宿っているわけもなく、カラオケボックスの薄暗い中でもはっきりと分かるぐらいに不快を訴えていた。帰りたいと乞うているのでは、と思った。マサキがそう思っていたら、リョウコの口がゆっくりと開いた。
「うちの大学だと恋愛できそうにないよ」
「リョウコのところだって同じ文系じゃん。恋愛するために来てるような連中もいるんじゃないか？」
「そんな軽いのはヤダ。うちのとこだと、軽いヤツか、昔の小説に書いた本人が想定してもないコトを見いだすのに幸福感を見いだす

ようなヤツしかいないよ。その、さ、マサキみたいなタイプ、うちにはいないよ」
「オレみたいなタイプってどんなタイプ？」
「どんなっていわれても、感覚としては分かるんだけど、言葉にするとなると」
「リョウコはサークルには入ってないの？」
「はじめのうちはダンスサークルに入ってたけれど、いろいろとおもしろくなくてやめちゃった。それからはどこにも」
「どこかしら入ればいいのに。それか新しく立ち上げるとか。ぐんと人のつながりが増えるんだから、つきあいたいって思える人も一人や二人できるもんでしょ」
　リョウコはあいまいな返事をして、孤独にも演奏をつづけるカラオケに顔を背けた。メロディは二番目のサビにさしかかって、しかし画面に移される映像は盛り上がりに欠ける地味な女のたたずみだった。
「いっそ、マサキたちのいる大学にしておけばよかったな」
「リョウコの大学ならハイレベルなコトできるじゃん。うちなんかせいぜい文学関係の授業で毎回ジェンダー問題をやるぐらいだよ、飽きるぐらいにね」
「それは認めるけど、でも、アカデミックなだけ。もっと人間じみたものがないの、その、バカらしい雰囲気。いっつもピリピリして、ただいるだけで疲れるんだ」
「マルリでその疲れをとればいいんじゃないかな。オレらはマルリ。この集まりだったらどんなバカなこともできるし、ピリピリなんてしない」
「でも」
「たとえ付きあっていても、この集まりになればマルリなんだ、それ以外のなにものでもない」
　カラオケが間奏を奏ではじめた。ギターらしき音が小鳥にさえずりのように細かく音符を並べてゆく。だがそれを遮るのが戸の開け

閉めだった。ルミが手にしているコップには、とてもじゃないが飲みものといえる色とは程遠い、まるで絵の具の筆をあらったあとの水だった。その液の上には茶色っぽい色合いの泡がブクブクとたっていて、なくなるけはいがしなかった。コップの中のみならず、外側にも、ただならぬ残骸のしたたりが見られた。リョウコに目を向ければ、あぜんとした目を大きく見ひらいていた。

「ルミお手製のカオスドリンクでーす」

「うわ、見るからに危険そう」

「マサキには次につくってあげるから、配合はバッチリ頭の中に入ってるよ」

「そんなの頭に入れるな」

「これだけじゃないよ、ほかにもたくさん」

「あのなー、ほかのコトに頭使おうぜ」

「だって楽しいじゃん、はいこれ」

ルミはリョウコの隣ではなく、マサキの隣にいったん腰を下ろした。そうしてからもう一度腰を浮かせて、ついにソレをリョウコ前のテーブルに置いた。コップについた残骸が面をつたい、テーブルにこぼれおちた。マサキとルミの会話は途切れて、二つの視線がリョウコにビームしていた。

リョウコはコップに手をのばさなかった。右手は右太ももの上で、左手は右手首の上だった。コップを見つめる目は気まずいときに見たそれとおなじだった。どんなまずい飲みものかを想像して恐れている表情とは程遠い。むしろ飲みもののコトは眼中にないかのようだった。

バックでカラオケが最後のサビに入った。ベースやギター、ドラムの音が激しくリョウコをけしかける。飲んでしまえ、いさぎよく飲んでしまえ！　あのカップルの前でもだえるがよい！　リョウコ以外は、音さえも明るい調子だったのである。

リョウコがコップをつかんだ。胸の前まで持ちあげて、そこで右手をそえた。しかしなお口に運ぶコトはせず、つまらなそうな目で

茶色いブクブクを眺めていた。細かな泡がいくつかつぶれて、リョウコは二人のいる方に顔をやった。

厳密には二人の方ではなかった。マサキはリョウコの強い視線を目にひしひしと感じたのだった。寸分狂わず目と目があって、なにか訴えたそうだった。だがつまらなそうな表情でリョウコはじいっと見つめてくるばかりだった。文句をいわず、また、楽しげな要素もなかった。

しばらく視線を重ねたままでいたら、リョウコは突然狂ったようにコップの中身をがぶ飲みした。ひとり歓声をあげる背後の女。マサキは彼女の変貌ぶりに言葉がでなかった。

ぱーと5

ルミの悪ふざけは神がかっていた。ルミが人目を気にせず混ぜてくる飲み物は、それぞれはおいしものであるはずなのに、たがいがけんかしてよいところを全て殺してしまっていた。あまり大きな反応をしないリョウコと、酒が入っているかのようにオーバーなリアクションをとるマサキ。ではルミはどうかというと、カラオケで九十点以上しかたたきださないという、マサキは分かっていたものの、それはそれで神がかった状態だった。

フリータイムで部屋に入って四時間。マルリの一行、特にルミ以外は飽きつつあった。新たに悪ふざけのチャンスを待つルミを見ているマサキは、なによりもリョウコを気にかけていた。しきりにチラチラとうかがってみれば、彼女は左手側でルミの作品を口にしていた。だが、まずい、だとか、うわあ、などという反応がなくなってしまっていた。ただ無表情に泥水をすすっていた。ますますリョウコは暗くなっていた。気がふれたかのようにテンションの高いルミは全く気づいていないようだった。

このようなとき、主催者としての立場は便利だ。マサキはルミが次の曲を入れようとしたところで終わりにした。歌い足りなくて不満たらたらのルミは無視して、リョウコのためにカラオケボックスをあとにしたのだった。

マサキは次にどこかのファミレスに会場を移そうと考えていた。サラダ好きのリョウコの機嫌をとるためにもサラダバーのあるファミレスで、リョウコ中心の話題で盛りあがろうと企てていた。にもかかわらずそれが徒労に終わってしまった。というのはリョウコが帰るといいだしたからだった。

「えー、まだまだ陽が高いよ。帰るなんてもったいない」

「なんだか気分が悪くて、熱っぽいというか」

「まさか私の奇跡ドリンクのせい？」

「ううん、あの飲みもののせいじゃないと思うよ。いろいろあって疲れてるのもあるから、それがここにきてどっときたんだよ」
「ならルミのカオスにあたったんだろう。うん、もう夏休みなんだからゆっくり休みな。それで、元気になったらまたの機会に」
「うん、そうしよう」
リョウコはマサキに視線を送ったまま二歩、あとずさりした。それから右手をふってバイバイした。くるりと右脚を軸にまわったかと思えば、マサキに背を向けて駅の方へと歩いていった。足早だった。
不思議だったのは視線だった。視線は絶えずマサキに向けられていた。ずっと、マサキだけに。ルミに目を向けることは一刻もなかった。たんに偶然が重なったものといえばそれまでだが、カラオケ中のリョウコを思うと、どうも偶然とは思えないものがあった。
声もまた、ルミと話しているときとマサキのときとでは調子が違った。マサキに対する言葉の方があからさまに明るいものだった。彼女の姿が少しばかり小さくなったところでルミと目をあわせたが、ルミもさすがに変だと思ったらしかった。
「どうしたのかな」
「本人がああいってるんだ、そういうことなんじゃないかな」
「でもマサキと話してる分には、体調が悪いふうには全然思わなかったけれど。むしろ元気というか」
「でも顔は明らかに調子悪そうだったよ」
「そう？」
「うん。ルミは少しでもテンションがあがるとまわりが見えなくなるところがあるんだから。今日もリョウコがどんな表情してたかなんて覚えてないだろ？」
マサキは行くあてもなく歩きだした。半テンポ遅れてルミもついてきて、左腕に腕を絡めてきた。ナミの生肌が密着して温かさが伝わってくるのだが、夏の暑さがそこに加わって心地よいという感覚ではなかった。

特にどこか、というあてがあったわけではなく、とりあえずは駅へ歩けばどこへゆくにも都合がよいだろうと、リョウコの歩いたところをたどった。リョウコの姿は、いつしか通りから消えていた。
「そこがルミの悪いところ。気をつけないとダメだよ」
「確かによくは覚えてないけれど、でも、そんなに？」
「特に後半はひどかったよ。だからカラオケを終わりにしたんだ。あれ以上続けてたら、大変なコトになってたかもよ」
ルミの声がらしくない声で、ごめん、とつぶやいた。すこしずつしめあげられてゆくマサキの腕から、ルミがようやくトチ狂ったテンションの世界から戻ってきたコトを知った。より一層落ち着きを取り戻すために、マサキはもう一方の手を絡みつく腕にそえた。
「分かればよろしい」
「私、リョウコに悪いコトしたんだね、なら、謝らないと」
「それよりもまず、自分がどれだけまずい飲みものをつくったかを分からなきゃな」
「カラオケに戻る？」
「うんや、途中でペットボトル買いあさって、どっちかの家でやろう」
「ならマサキんとこがいい」
「ならそうしよう」
するとたちまち、落ち着きを取り戻していた顔がパッと明るくなった。またおかしなテンションになるだろうかと思ったものの、そこまでは至らず、ほどよい高揚感の中にとどめていたらしかった。腕のからまりが弱くなって、多少なりとも左腕に自由がきくようになった。
マサキはルミに触れているだけの右手でその腕をほどいた。左腕は自由になったが、彼女はちょっとばかりの戸惑いに顔を染めていた。しかし離れるつもりはなく、たんに手をつなぐためであって、指同士を絡めれば、表情が再び落ち着いた。腕を絡めているのは恥ずかしいよ、とはにかんでみれば、声をあげてナミが笑った。

それから会話はなかった。ただ歩道を駅に向かって歩くだけだった。手をつないで、同じ歩調を保ちながら、時々たがいに顔を合わせながら。マサキにとって、ルミとつながっている手の感覚が心地よかった。目が合ったときに湧き上がるうれしさに、心が落ち着かなかった。だがフワフワした気分は決して心地の悪いものではなかった。このままどっぷりとマシュマロのような柔らかさとナミの温かさの中にうずまっていたかった。

ひと気のない住宅街の中を縫うように進んでいった。マサキの鼻の下に汗がにじんでいて、それさえも太陽は焼こうとしていた。だがルミに顔を向けたときにはちょうど影となるところなので、焼き切るコトはかなわない。だが、ルミの柔らかさに吸い取られてしまいそうになるのだった。

十字路をちょうどよこぎろうというところだった。ルミの顔を見ようとしたところ、マサキはふと視界の中に見覚えのあるスカートが目に入った気がした。どこかの制服を思わせる、赤と白を基調としたひざ上十数センチのスカートだ。気がした、ではなく、見た。

いきなり変な音を耳にした。不自然な三発で、同時にルミが、いっ、とひきつった声をあげた。視界の隅っこでちらつくスカートが飛び去っていった。

不自然な三発について、マサキは聞き覚えがあった。場所は部室、精密射撃の際に一学年下の男子学生が使っていた。ボス、ボスという発砲音だった。

二人をずっとつないできた恋人つなぎが離れて、ルミは左二の腕を押さえた。体をよじって腕の様子を眺めていて、マサキの立ち位置からではなにを目にしているのか分からなかった。ふと視線があがったら、遠くの十字路を右に曲がるスカートの姿があった。

ルミの反対側にまわって押さえているところを見たら、赤い丸が二つ、日焼けしていない肌にきざまれていた。夜空に浮かぶ星のような美しさをふと覚えるも、赤くなったところをなでて、現実を見据えた。あたりのアスファルトに目を凝らしてみれば、道路の端に

白いＢＢ弾が転がっていた。
「痛、こんなことするのは誰よ」
「待ち伏せしてたみたいだけれど、なんのためだか」
「固定ガス銃の発砲音だったけれど、ところでマサキ、撃った人は見た？」
「うん、撃ったらすぐに逃げた、あっちに」
「通り魔的なヤツなのかな」
マサキの指さす方向を見ながら、ルミが首をかしげた。一緒になってマサキも首をかしげた。赤白スカートを通り魔としなければこの状況を説明できなかった。理由も分からないし、二人に襲われるような理由も思いつかなかった。

マサキの家でも、ルミはしきりに腕の赤を気にかけていた。ちょっと時間ができる度にのぞきこんでいた。たわいのない話をしたりだとかキスしたりだとかボーッとしたり愛撫したりと、その時々で起こるすき間に撃たれた痕跡は必ず入りこんできた。
たとえエアガンで撃たれただけとはいえども、人をエアガンで撃つのは立派な犯罪である。だからマサキはなんども警察にいこうと訴えるのだが、ルミは全然気にしていない様子だった。帰るといったときも、マサキはつき添おうと申し出たものの、ひとりで大丈夫、と言い放ったのだった。
静かになった部屋で、マサキはデミタスカップをすすった。ルミのにおいが残っていたが、たちまち濃いコーヒーの香りが部屋に充満した。パソコンを開くわけでもなく、テレビをつけるでもなく、折りたたみ式の机とイスをだして即席のバーカウンターをつくった。それからカップを机上において、その横にはコースター。コンロからマキネッタを持ちだして、コースターにのせた。注ぎ口からコーヒーの湯気が噴き出した。
マサキはもう一口、エスプレッソを口に含んだ。強い苦みが目をひどくたたき、赤い点々がチカチカ点滅しているかのようなイメー

ジが頭に浮かんだ。できもののような小さい赤、虫に刺されたかのような跡、細い筆でチョンチョンとつけた赤い点―いろいろと適当な言葉を探してみたが、やはりエアガンで撃たれた跡、とするのがマサキにはしっくりきた。

カップに残るコーヒーを全て、流しこむように飲みほした。口と鼻に残る濃厚な余韻を感じながら、マキネッタから新しい一杯を注いだ。カップを鼻の下に持ってゆき、香りを確かめた。強くも甘い香り。豆の奥底からじわじわとにじむ、難しい甘さだった。

ケータイが突然、パソコンの横でバイブした。サブディスプレイの有機ＥＬに目を凝らせばナミとあった。なんだろうと思う一方、嫌な予感がした。パソコンのそばに立ったままがケータイを開けば、電話の着信だった。あわてて手にとれば、ナミの声がする裏で、軽やかなＢＧＭらしきものが流れていた。

「またやられた」

「エアガンか？　どこか怪我してたりしてない？」

「服の上にあたった感じは何発もあったし、腕とか脚も痛い。あと、鏡で見てないから分からないけど、ほっぺたにもいくつか痛いところが」

「いまどこにいる？」

「家の近くのスーパーにげこんでる。ちょっとしてから帰るつもり」

「オレそっちにいくよ」

「大丈夫、走れば一分もかからないから、撃ってくる隙もないでしょ」

「でも心配でたまらない」

「うれしいけど、平気よ。あっちは私よりも足が遅いから」

「ならいいんだけど。本当に気をつけて、ＢＢ弾でも当たり所が悪かったら大けがだから」

「マサキよりも私の方がよく知ってる。それじゃ、いくから」

「うん。あさって、部室で」

おやすみ、という言葉があって、電話が切れた。マサキは通話画面から待ち受けに変わりゆく画面をずっと見ていた。表面に皮脂がついて見づらくて、袖口で画面をこすった。パチッっと耳障りのよい音をたてて折り、ケータイをデミタスカップの横に置いた。

マサキは立ったまま左手をテーブルに立てて、次にコーヒーを一気飲みした。マキネッタに残っている二杯分のコーヒーも飲みほした。熱くないエスプレッソはマサキの舌にはまずくて、鉄砲水のような勢いで流しこんだ。

空っぽになったカップの底に残る茶色に目をやりながら、マサキはため息をついた。ルミの意見を押し切ってでもルミに付き添えばよかった。そうすれば多少なりともまわりの様子をうかがいながら予防できたし、襲われてもかばうことができたろう。家に送らなかったから、どちらもできなかった。

パソコンの電源を入れながらも、マサキの脳裏に揺れているのは赤と白のスカートだった。今まさにルミをねらっている人はそのスカートをはいているのだろうか。全く同じ銃でルミをねらったのか。パソコンを前に腰かけてみれば、いろいろと必要なデータをききそびれていたコトに気づいた。

コーヒー一式をゆすいでから、マサキはブラウザを起動させた。迷うことなくブックマークからあのホームページをクリックして、画面をりょんに染めた。なにもしないでいたらスカートのコトばかりを考えてしまいそうでいやだったから、マキネッタをあらい、パソコンをつけたのだった。

更新された作品は一つだけ、詩ともショートストーリーともつかないものだった。?なんてすがすがしい気持ち！?という行からはじまって、相手を?撃った?コトに対して、相手を?追いかけまわした?コトに対しての快感をつづり、相手の?逃げる背中?に対して優越感を覚えていた。

しかしつかの間、次の連では禁断症状があらわれていた—?仕留めて?いないことへの不満と不快感と、それからやる気と。奇妙な

のが、仕留めるコトを求めているはずなのに、？仲を引き裂こう？と企んでいる詩の流れにそぐわない行が、とってつけられたかのように存在していた。

マサキは不思議な感覚で文章を読んでいた。相手を撃って、それから追い回したその人物が、赤と白のスカートをはいていたのだ。見覚えのあるスカートをはいて、ナミの背中を追っているのだ。撃てるもの、それはエアガンで、逃げる背中に向かって何発も発砲していた。

りょんという人物。なんら関係がないと思っていた人がいきなり、ぐっと身近な人となった。それこそ半径三メートル以内の範囲に出くわしたのではないか―まさか、とマサキはつぶやいた。そんな都合のよいコト、あってたまるか。でもなんとなく、リョウコと響きが似ている、そう思った。

背後でバイブが机の天板をたたいた。ルミからだと思って手にとってみたら、リョウコだった。手の中でまだケータイが震えていたので、ボタンを押して黙らせた。

ぱーと6

メールは、いきたいところがあるからつきあってほしい、という文面だった。リョウコがそのようなコトをいうのははじめてだったので驚いたものの、マサキはＯＫをだした。だが、お昼前に集合しようとしているところ、どこへゆくつもりなのかさっぱり分からないのが素直な感想だった。どこかのレジャースポットなら移動のコトを考えてもっとはやくしてもよいだろう。十一時集合というのは中途半端だった。

そんなリョウコの計画のもと、マサキが到着したのはあの大型ショッピングセンターの、もう一店あるビュッフェバイキングだった。二人が来たときには三組が既に列をなしていて、二人はその四組目となった。

「前来た時に目つけてたんだ。チョコの噴水はないけど、こっちの方がいいなーって思ってね」

「ならルミも一緒に誘えばいいのに。やっぱ気まずいの？」

「まあ、うん」

「気にしなくたっていいのに。マルリはマルリなんだから」

「そうなんだけれど、あたいの中の問題だから」

「にしても、リョウコから誘いがあるとは思わなかったな」

「マルリとしてなんども主催してるけど？」

「こうやってリョウコが、いきたい、だなんて。マルリは持ち回りでやってるじゃん」

「そんなことないよ」

リョウコのはにかんだ表情もまた見慣れないものだった。マサキにずっと向けていた顔を通路の中央に逸らしてにやついた。背中があっという間に丸まって左手が右手の親指をつかんだ。こんな表情をするのか、と新しい発見だった。

店員が先頭の客に声をかけ、すると次々と客が立ちあがって、マ

サキの方へと波が押し寄せてきた。二人も波となって店内へと流れこんだ。マサキはふと後ろを見てみたら、十人ほどの人がいつの間にか続いていた。

受けつけの段階で少々つっかえた感じはあったものの、それ以外はスムーズで、料理が並ぶブース傍のテーブルに腰を落ち着けることができた。かと思えばリョウコはさっそく料理をとりに慌ただしく席を立った。リョウコの向かう先は大きなサラダコーナー。前におとずれたところの倍はあった。リョウコがいきたいという最大の理由だと、簡単に想像がついた。

マサキも料理をとって戻ってきたら、シーザーサラダとコブサラダを皿の半分ずつ、山のようにもったリョウコが待っていた。またお肉ばっかり、と毒づかれ、またサラダばっかり、といいかえした。

「ほら、ここあんなにサラダあるんだよ。名前のあるサラダだけじゃなくて、野菜もたくさんあって、ドレッシングもたくさん。サラダじゃないけど、野菜たっぷりの料理も」

「リョウコのための場所、って感じだな。でも、ベジタリアン、ってわけじゃないんだろ？　最近野菜を食べてるリョウコしか見てない気がする」

「お肉だって食べるけど、そんな多くないよ。野菜が八で、お肉は二あればいいかなって」

「たぶん最近のコトを考えると、野菜が九・九で、肉は〇・一もないんじゃないか？」

「それはいいすぎだよ」

リョウコはケラケラ笑いながらレタスにフォークを刺した。大げさにあごを動かしてムシャムシャほおばり、ほおの向こうがわからレタスのみずみずしい音が聞こえた。十回かそこら手早くかみ砕いて、うなずくようにして胃に落とした。

対してマサキはグラタンをろくに噛まずに食べていた。

「なあリョウコ、俺を誘った理由がなにかあるんじゃないのか？きっとルミを誘った方がいろいろ盛りあがるだろうに」

「マサキと話がしたかったというか、もちろんこれ食べるのにひとりじゃちょっとキツイってのもあるよ」
「ひとりでサラダをむさぼる姿はあまり見たくないな」
「そんなひどい言葉を使わないでよ。その、ルミとはちょっと会いたくないというか、二人っきりでいられる自信がなくて」
リョウコもまたさりげなくひどい言葉を使っていた。会いたくないなんて。つきあっているカップルと一緒にいるのが気まずいからといって、それはいいすぎというものである。きまりが悪い、というよりも嫌いといったニュアンスが強いように感じられた。これには考えすぎだとマサキは思ったけれども、高校三年間から今にいたるまでずっと仲良くしてきたのだから、どうして？　という感覚になるのだった。
マサキが料理の半分しか手をつけていない中、リョウコは大量のサラダを平らげて、新しいサラダを求めて席を立った。ここのサラダおいしい、と口にしてサラダコーナーへ向かうリョウコ。マサキが見たリョウコの表情が、ひさびさに明るくて、心から楽しんでいる様子だった。また新しい発見だった。
今度は皿いっぱいにサラダがのせられていた。野菜の上には金色のドレッシングがかかっていた。緑に赤に黄色に金色、店でつくったサラダよりも色鮮やかだった。
「会いたくないってのは、前からずっとそう思ってた？」
「そうじゃないけれど」
「じゃあつきあってるコトを知ってから」
「この話はやめよう。お互いにいやになるだけ」
「じゃあ、話がしたいってのはどんなコト」
「つきあってるのか、ってコト」
「結局似たようなもんじゃないか」
だって、とリョウコは串刺しのブロッコリーを持ちあげながら口をとがらせた。続けて言葉が飛んでくると思ったら、ブロッコリーを口に入れて、でてくるだろう言葉を封じでしまった。大げさにか

み砕いてゆくリョウコ。マサキはその様子をずっと見つめていた。
「さりげなくきいたのはきいたけど、はっきりときいてはないんだもの」
「あのなあ、きいたんだったらそれでいいじゃん」
「ちゃんときいておきたいの。で、つきあってるの？」
「んああ、つきあってるよ」
「いつから」
「いつから、というか、いつの間にかそんな状況に、っていった方がいいかな。あるときに？好きー？？？うん好きー？って、こんな感じ」
「なんでそんな適当なのよ」
　リョウコはマサキめがけてフォークに刺さったアスパラガスをふりまわしてきた。アスパラのとがったところが槍先のようにマサキを威嚇していた。だがそれよりもマサキをビビらせたのがリョウコの顔つきだった。まるで非難するような目の鋭さ、わずかに波うつ眉間、明らかに不満タラタラだ。だが、どこに不満なのか、さっぱり分からなかった。
　そもそもルミは適当すぎる、とリョウコが話しはじめた。まわりのコトを考えないだの、後先考えないで行動するだとか、リョウコの早口具合といったらもうマシンガンも驚きの弾幕だった。記すにはあまりにも量が多くてかなわないコトであるが、その弾幕のどこをとっても、ルミに対する悪口だった。度の過ぎた、マサキへの間接的な侮辱ともいえるような言葉たちだった。
「なあリョウコ、お前が話したいコトってのはこんなコトなのか」
「マサキはつきあってるんでしょ？　あたいのいってるコトが分からないでもないでしょ」
「それでもいいすぎだ。これ以上ナミを悪くいうなら黙っちゃいられない。だから、もう話すな。このネタは終わりにしてくれ」
　マサキはフォークを置いて腕を組んだ。ほとんど食べつくされたサラダに目を落としつつ、体の奥底から怒りが迫ってきているのを

感じていた。どうしてルミのカレシを前にそのようなコトを並べることができるのか分からなかった。
「やっぱりマサキはルミが好きなんだね」
「なあ、なにを企んでるんだ？」
「ルミの方が、いいんだね」
「？方が？ってなんだよ」
「だって、ルミが好きなんでしょ。ルミの方が好きで、つきあってるんでしょ」
　リョウコの言葉がしっくりとこなかった。言葉が足りない。リョウコははたして誰をルミと比べているのか、マサキの頭の中にはどの顔も浮かんでこなかった。
　言葉だけじゃない。あれだけ鋭い目をしてルミをけなしまくったリョウコが、たちまちしなしなと小さくなってしまったのだ。フォークにはアスパラが刺さったまま皿においてしまって、うつむいた顔には威勢のよさもない。口からでる言葉も弱かった。頭の回転が止まる、としてもそれらしい言葉だが、それよりも、頭がショートしてしまったとするのが正しいかもしなかった。
　ねえ、とか細い声とともに、リョウコが顔をあげた。
「ルミとあたいって、どう違うの？」
「ずいぶん難しいコトをきくんだな」
「ルミはだって、ずぼらで適当で気づかいする気なんてさらさらないし、やんちゃでどっちかっていうと男の子って感じだし、趣味なんかがっつり男だし」
「そういうところはあるけれど」
「あたいはもっと気づかいできるし、身の回りのコトはきちんとするし、もっとおとなしくて女の子らしいけれど、サラダの食べっぷりだけは例外としても、ルミに比べればいいところだらけなのに」
　マサキの頭がようやく動きだした。誰とルミを比べているのかも分かった。静かにリョウコの言葉に耳を傾けながらも驚いている。そのようなそぶりはどこにもなかった。この席ではじめて、そのコ

トをさとった。ルミの大ざっぱな挙動の中にもある色目にさえ気づけるのだから、リョウコがもしひきつけようとする目をしていたのならば分かっているはずだ。だのに今までそのような感じはしなかった。だから色目は使ってきてはいない。

マサキは半ば呆然としてリョウコを見つめた。リョウコはずっと下を向いたまま、言葉を発した。

「あたいには魅力ないのかな」

「いや、リョウコはリョウコで十分魅力的だよ。絶対に好きになってくれる人がいるって」

「でもマサキはルミがいいんでしょ？」

「それは俺の気持ちの問題だよ。俺はルミが好き。リョウコは親友。俺らはマルリ」

リョウコがテーブルにひじをついて頭を抱える様子を目の当たりにしても、マサキはどうしようもなかった。彼女の気持ちの大きさを知って、うれしい気持ちというよりも戸惑いの方が大きいのである。どうして急にいいだしたのか、それも二人の恋愛を知ってから。その上、大きな気持ちはひしひしと伝わってくるのに、リョウコが直接口に出さないコトも、マサキを戸惑わせる一因だった。

「ナミがいなくなってくれればいいのに」

「そんな縁起の悪いコトをいうな」

「でも、そうすれば、マサキはあたいに」

「いい加減やめてくれ」

マサキは身をのりだしてリョウコに迫った。強い息を伴った声。マサキはついに耐えられなくなった。リョウコの言葉がついにナミを否定した。ナミを消してしまえばよいなんていう考え方、いったいどこから湧いて出てくるのか不思議でたまらなく、また、そのような考えにいたるリョウコが許せなかった。

「たとえ前から知ってる人であるとしても、ナミを侮辱するのは許せない。これ以上そういうコトを口にしてみろ。俺はなにをするか、全く知らないからな」

マサキの脅しに、リョウコはなにも答えなかった。

リョウコはそれっきり黙ったままだった。ひたすらサラダをむさぼってはおかわりに席をたち、うずたかい白磁の皿の山をつくった。一方、マサキは、最初のひと皿は平らげるコトができたが、二皿目は、あまりにもまずくて口にも入らなかった。まわりからは楽しそうな会話の声が、皿にぶつかるフォークの甲高い音にさえぎられながらも、ひっきりなしに聞こえてきた。

葬式の席から脱してからも、リョウコと言葉を交わすコトはほとんどなかった。リョウコがお金を出して、それからマサキが割り勘分を渡して、そのときの、？割り勘いくら？？が唯一のまともな言葉だった。大型ショッピングセンターの中にいるにもかかわらず、ビュッフェバイキングの前で別れてしまった。マサキは積もり積もったフラストレーションのために帰る気さえもおきず、ショッピングセンターの中をふらふらさまよって気分転換してからの帰途だった。別れたあと、リョウコがなにをしていたかは分からないし、知りたくもなかった。

イライラ発散のためといってもいいような大量のお菓子のつまった袋を手にして帰ったマサキは真っ先にテレビリモコンに手をのばした。つけてみれば、夕方のニュース番組も後半にさしかかろうとしていた。

五分程度のヘッドラインを見て、マサキはお菓子のクッキーをかじりながらパソコンに向かった。別段なんらかの意図があるわけでもないが、とりあえずパソコンをつければなにかイライラを紛らわせる方法があるだろうと思った。

クッキーを五枚胃に放りこんでいたら、いつしかりょんのホームページにアクセスしていた。ブラウザを出したらとりあえずりょんのページ、というのが習慣として身についてしまっていたらしかった。あっ、と思ったのだが、ほかに心当たりのあるサイトもないので、六枚目に手をのばしながらものぞき見るコトにした。

クッキーをくわえたマサキは、ホームページのおかしなことに気づいた。履歴が全部消えていて、プロフィールだとか作品とか、項目が全部どこかにいってしまった。あるのはホームページの名前と、その下に続くゴシック体の行ばかりだった。右はじのスクロールボタンがそれなりに小さいから、ゴシック体はそれなりの大作といったところか。

しかしたちまち読みはじめてみれば、マサキのクッキーを食べる口が止まった。？山積みの皿　まだつきぬ思慕？という一節からはじまったその詩は、短い行の積み重ねで形づくられていた。目線の高さまで積み上がった白い皿にまつわる行が続いて一つの連となし、連が変わればたちまち回想の詩行がはじまった。

とある女と男たちの出会いを描いた連、たくさんの人々の中で形作られたとあるグループについての連、仲良しグループがカラオケに行く連、ファミレスでだべる連、それからしばらくはそのグループについて書いた行が並んだ。フォントをわざと大きくしたり小さくしたり、画面上の配置をずらしてみたり等といったコトはなく、淡々と言葉が置かれていた。

第十六連を数えたときになって、行に不穏な言葉が並ぶようになった。グループの一人に疑いを投げかけて、とことん疑いぬいて、恨みに変わってゆく。次の連にうつればたちまちののしりの嵐となって、？殺してやる？？撃ってやる？？消してやる？といった言葉が淡々としたゴシック体に表現されていた。連が変われば？ナントカしてやる？という意志が実際の行動になった。待ち伏せをして、？女を撃った？。銃口を向けられた女の表情といったらたまらない、と。

女の顔を描写する連が続き、だが最後の連となると、急に最初の連にあった山積みの皿がでてきて、皿の向こうにいる男に視線がうつった。？つきぬ思慕を　否定された哀れな人／ならばいっそ　傷跡を残そう／あきらめがつくように？という言葉で締めくくられた。

マサキはじっと最後の行に目をやっていたが、目をこすって、左

手でクッキーをつまみあげて、席からたった。芳しい丸を口へ運びながら、ベランダのある窓へと小股で歩いた。

マサキには、書かれている詩に心当たりがあった—山積みの皿。まずいバイキングで目にした、サラダをのせていた皿だ。デジャヴという言葉では片づけることができないほどの、鮮明なものだった。

口にくわえたまま、マサキはクッキーを折った。外はまだ真っ暗というわけではなく、夜空に雲の姿がはっきりと見えた。まるで油絵の具で塗りつけたような、重い雰囲気の雲だった。

マサキは口に残ったかけらをかみ砕きながら、リョウコのふさぎこんだ顔を思いだした。サイトの人が書いたようなコトを、リョウコもサラダに食らいつきながら考えていたのだろうか。そう考えていたら、リョウコに申し訳ない気持ちになった。その気持ちをくみ取ってから断ればよかった、と。あれではまるでルミを選んでリョウコを蹴りとばしてしまったようなものだ。

いますぐに連絡を取るべきか、マサキはポケットに浮かびあがるケータイのふくらみに手をそえた。でも、リョウコの感情がまだ落ち着いていないような気がしてやめた。明日になれば落ち着いているだろうから、するとしたら明日、と決めて残りのクッキーを口に放った。

ぱーと7（前書き）

今回が最終話です。

ぱーと7

マサキはサークルの練習が終わってからリョウコに電話をかけるつもりだった。右隣に座ってライフル銃を愛でているルミには昨日の件は内緒にしていた。たがいに気分のよいものではないから、マサキは緩衝材になろうとした。

ルミは朝九時であるにもかかわらず陽気だった。鼻歌まじりの彼女は、競技用ゴーグルをしたまま、その音にあわせて銃を布切れで磨いた。マサキが部室にやってきたときにはルミは既に射撃をしていたので、いい結果を出せたのだろう。

たずねてみたら、その通りだった。

「いやあ、プレートでついに満点とったんだ。ムーバーもかなりよくて」

「もしかしてタイミング悪かった？　俺が入ったときちょうどムーバーやってたじゃん」

「うん、アレのおかげで三発外した」

「ああ、やっぱり。それは悪かった」

「でもプレートで満点はうれしいよ」

「ライフルのプレートは難しいよね。的小さいし、後半は一発でも外したら競技終了だし」

ルミの笑みにはエアガン襲撃の痕跡はどこにもなかった。いつも通りの、むしろいつも以上にニコニコしていた。ニヒイ、と声をもらしたかと思えば、銃をケースにおき、布切れもケースの隅っこに投げた。ちょっとだけ腰をうかべて、ルミの手はパイプイスをつかんだ。なにをするのかとマサキは眺めていたところ、ずるずると横にずれて、イスを落とした。わずかばかりの耳障りな音の後、パイプイスのきしむ音が聞こえた。彼女の胸と肩と顔が、マサキのそばにあった。

ルミはマサキに向かって一度にやついて、それから体を傾けて、

肩をマサキのとぴったりつけた。右肩に、じんわりと温かみがしみこんできて、彼女の肌が心地よかった。
「やっぱりこうしてるのがいちばんおちつく」
「どうしたの」
「本当はね、ずっとビクビクしたてんだ。また撃たれるんじゃないかって不安で怖くて、なんでもない道なのに心臓バクバクで。昨日なんか一歩も外にでてないからね」
「やっぱり気にしてたんだね、襲われたこと」
「だって、どこかから撃たれるかもしれないと思ったら、なにもできなくて」
部室の丸いドアノブがキュイキュイと鳴った。ナミが扉に目を向けて、マサキはルミの後頭部に目を向けた。誰かが入ってくる。活動開始時間まであと二十分ぐらいの頃あいだったから、部員でとなると、時間に厳しい一年ののっぽしか考えつかなかった。
カチ、とあく音がした。間をおかずして、ドアがあたかも蹴り飛ばされたかのように激しく開け放たれた。壁にドアがぶつかりうまれた音は人の体さえも震えさせるほどだった。本当に蹴り飛ばしたらしく、戸の下のあたりに足跡がついていた。明らかに、部員とは違う登場の仕方だった。
開かれた戸口に立っているのはリョウコだった。よれよれのカットソーにホットパンツといういで立ちで、左手には小さなバッグを提げていた。それだけならよいものの、右手には黒いなにかをつかんでいた。リョウコは黒いなにかを向けてきた。丸い穴、手に包まれたグリップ、簡素な照準器。一瞬で黒いものの特徴をとらえたマサキは銃だとすぐに分かったけれど、それだけだった。
バアアアアアアアアアアアアアア―銃がガスで動作する音がけたたましくあたりを包みこんだ。すさまじい連射音の怒涛の中、丸い穴から放たれた白いＢＢ弾は、ルミをめがけて襲いかかってゆく。弾幕はルミの顔に集中していた。何十発というプラスチックのかたまりが、間髪を容れずナミの顔をぶった。いくつかの流れ弾が、マサキのほ

おや額にも命中した。
　リョウコの手にあるガス式マシンピストルがおとなしくなった。六十発という装弾数をたった二秒で撃ち尽くしてしまった。弾が全て発射されて残っていないのに、リョウコは何度か引き金を引いた。それから、あたかもひもで操作しているかのように、ニターっとほほ笑んでみせた。もはや病的といえるような笑顔だった。
　りょん、マサキは反射的に叫んだ。どうしてサイト管理人の名を口にしたかは分からなかった。しかし、その音を耳にして、リョウコの不気味な笑みが青ざめた。みるみる間に白くなってゆく中、二歩後ずさりして、逃げるように走っていってしまった。

　マサキの家のベッドで、ルミは縮こまっていた。幸いゴーグルをしていたから目にけがを負うコトはなかったものの、顔じゅうが被弾で赤くなってしまった。ルミとリョウコとの間は三メートルもなかったので、ＢＢ弾はかなりの強さをもって顔を痛めつけたのだろう。たとえマサキのエアガンに対する知識が彼女より乏しいとはいえど、あの銃声を聞くだけでかなり強力な銃であるとマサキにも分かった。
　ずっとルミは押し黙っていた。目のまわりはしきりにこすったがために赤くなって、銃で撃たれた跡の赤と遜色なかった。これでもだいぶ落ち着いた方で、ごく数分前まではずっと泣いていた。部室では茫然自失で、マサキがけがを確かめているうちに泣きだして、マサキの家までの道ではずっとマサキに抱えられながらむせび泣いていた。
　マサキはネットブラウジングをやめて、ユニットバスにこもった。ルミの充血した目がずっと追跡してきていたが、かわいそうに思いながらも、その目にこたえるコトはしなかった。ケータイを取り出すなり、履歴からリョウコの電話番号をみつけだしダイヤルする。耳越しにリョウコの声を待つのだが、耳に語りかけてくるのは女性のアナウンスメントだった。電源が入っていないか圏外かのいずれ

かだといって、伝言を受けつける。マサキは、連絡をしてほしい、と伝えてきった。五つ目の伝言だった。五つとも同じセリフだった。

ユニットバスの戸を閉めて、ルミに目をやると、頭をやや反らすようにして鼻をすすって、ヨレヨレの襟をつかんでいた。ルミの視線がか弱い。自身の感じているいらだちに加えて、マサキもルミの悲しみに染まっていった。

マサキはルミのもとへと歩いている間、パソコンを気にした。画面いっぱいのブラウザに表示されているのは、データのないコトを表す４０４という数字だった。アドレスバーにはリょんのホームページのＵＲＬが並んでいた。その人が吐き出していた表現は全て、サーバーから削除されてしまっていた。りょんの世界が終わってしまったのである。

ルミのそばにたどり着いたマサキは自分の名を呼ぶか細い声をきいた。マサキは考える間もなく、気がついたら彼女を乱暴に抱きしめていた。おかしいぐらいに体が熱をもっていて、いまにも焼けただれてしまいそうだった。耳元で、ルミの震えた声が、どうしてリョウコが、とささやいた。

ぱーと7（後書き）

読んでくださった方はありがとうございます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5232p/

マル

2010年12月26日11時10分発行